

実践女子大学香雪記念資料館

第5回

新収蔵品展



2021年

6月7日(月)

~7月9日(金)



会場 実践女子大学香雪記念資料館 企画展示室 1
主催 実践女子大学香雪記念資料館
開館時間 10:30 ~ 16:00
休館日 土・日曜日
観覧料 無料
後援 渋谷区教育委員会

〒150-8538 東京都渋谷区東 1-1-49
TEL 03-6450-6805
H P <https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/>

1. 跡見花蹊「梅花猿猴図」(部分) / 2. 田井耕耘「踊姿絵 酒屋の御用」(部分)
3. 橋本青江「連璧帖」より(部分) / 4. 谷舜英「山水図」(部分)
*作品はすべて実践女子大学香雪記念資料館蔵

第5回 新収蔵品展

令和3年6月7日(月)～7月9日(金)
実践女子大学香雪記念資料館
企画展示室1

ごあいさつ

2020年度に香雪記念資料館に新収蔵となった作品を中心に展示いたしております。香雪記念資料館では1999年の創立以来、女性画家の作品の収集・研究・展示に努めてまいりました。絵筆を執った女性たちの制作の状況・動機・目的などは多彩です。そうした多様さは今回の展示からも窺えます。専門的な画技を身につけた女性たちの作品ばかりではなく、さまざまな立場の女性たちの「制作」には、女性たちの生き方が凝縮されていると言っても過言ではありません。女性の人生と制作に思いを馳せながら、コロナ禍をしばし忘れて、彼女たちの力作をどうかお楽しみください。

最後となりましたが、貴重なご所蔵品をご寄贈戴きました、原俊夫様、藪本俊一様に、衷心より御礼申し上げます。

令和3年6月
実践女子大学香雪記念資料館

やえざくらず 八重桜図 みくまろこう 三熊露香(生没年不詳)

18世紀末頃
絹本着色
1幅
36.0×56.6cm
落款「露香女」
印章「露香」「熊氏女子」白文方印・連印
賛「たをやめと 姿くらへや さくら花
尼 倭泉 時 八十四」、印章「貞」「□」
朱・白文方印・連印



淡墨に緑青と濃墨を滲ませながら桜の幹の独特な質感が、胡粉を薄く丁寧に塗り重ねながら八重の花弁が、それぞれ描き出されています。三熊露香は三熊思考(1730-94)の妹で、兄に学んで思考風の気品ある桜画を得意としました。ふたりは江戸後期の京都で専ら桜画を描いた桜絵師です。江戸時代後期に桜が絵画の題材として多く取り上げられるようになる一因に、本居宣長(1730-1801)も歌に詠んだように、大和心を代表する花・桜への讚美があったと言われます。また演芸ブームも手伝って多くの品種が開発されました。近江仁正寺藩主・市橋長昭(1773-1814)が描かせた《花譜》(国立公文書館蔵)には200種以上の桜が含まれています。賛を認めた倭泉(生没年不詳)は、京都の俳人・石田賦泉(生没年不詳)の妻で号を松林庵・傘庵といった女性俳人です。(N)

すまざくらしんず 須磨桜真図

おだしつしつ
織田瑟々(1779-1832)

天保2年(1831)
絹本着色
1幅
83.4×32.9cm
落款「須磨桜真圖 天保二辛卯冬 織田氏女瑟々寫」
印章「織田氏女・瑟瑟」白文連印、「惜華人」白文方印、
「芳華自中出」朱文長方印・遊印

墨と白緑を主体として比較的大胆な筆遣いで描かれる幹に対して、花の描写は実に精緻です。没骨法で描かれた花卉の透けるような柔らかな質感、そこにわずかに点じられた朱の艶やかさ、さらに近付いて見ると、葉の一点一点までしっかりと描かれていることに驚かされます。自ら「須磨桜真圖」と題したように桜花の真に迫ろうとする気迫と、その優雅さを余すところなく再現しようとする熱意に満ちています。織田瑟々は京都で三熊思考(1730-94)あるいは露香(生没年不詳)に学び、生涯専ら桜花を描き続けた絵師です。文化10年(1813)以降、故郷近江の川合寺に戻った後も桜図の制作を続け、地元では「織田桜」として親しまれました。本作は天保2年(1831)、瑟々53歳、亡くなる前年の冬に描かれた、まさに画業を集大成する佳品です。(N)



ばいかえんこうず 梅花猿猴図

あとみかけい
跡見花蹊(1840-1926)

19世紀後半～20世紀前半
絹本着色
1幅
116.0×34.9cm
落款「花蹊女史」
印章「華蹊」朱文長方印

跡見学園の創設者として知られる跡見花蹊は、摂津国に生まれ、頼山陽門下の宮原節庵(1806-85)に漢学、詩文、書を学び、石垣東山(1804-76)、円山応立(1817-75)、中島来章(1796-1871)、日根対山(1813-69)から画を学びました。上京後の明治8年(1875)に花蹊が開校した跡見女学校では、自ら絵画の授業で指導を行い、手本の作成にも尽力しました。

本作には紅梅の太い幹に座り、上方より垂れ下がる蔓を手繰り寄せるような仕種をする一匹の猿が描かれています。画面上部にうっすらと墨が刷かれていることから、夜の情景でしょうか。紅梅の樹は濃淡を抑えた、シルエットのような描き方がされている一方、猿は墨の濃淡と細かな毛描きで丁寧に描かれています。ひょうきんな猿の表情がとても可愛い作品です。(T)



群鴉画賛

甲斐和里子（1868-1962）賛

甲斐虎山（1867-1961）画

19～20世紀

紙本墨書・墨画

1幅

125.0×17.0cm

賛「はなちかふ かとたのおもの にはとりに もりのからすも ましる山さと わり子」

落款「虎山老夫」

印章「苦瓜庵主」白文方印

甲斐和里子は広島県福山市神辺町の勝願寺住職・足利義山（1824-1910）の娘として生まれ、同志社大学で英語やキリスト教などの西洋文化を学びました。明治32年（1899）には仏教精神に基づく教育を目指した顕道女学院を設立、翌年には夫・甲斐虎山とともに私塾文中園を開設します。同園は明治43年（1910）に京都高等女学校と合併し、現在の京都女子学園へと発展していきました。

虎山は名を駒藏といい、帆足杏雨（1810-84）に画を学んだとされています。

本作は夫である虎山の画に、和里子が賛を添えたもので、賛の和歌には、家の前の田んぼにいる鶏のなかに、森から来たカラスが交っているという山里の情景が詠まれています。虎山の画では、淡墨による渴筆で表された枯れ木に、群れ飛ぶカラスが濃墨で描かれています。（T）



芙蓉・菊図

清原春信（生没年不詳）

17世紀末～18世紀初頭

絹本着色

双幅

各83.7×34.1cm

落款 各「清原氏女雪信娘春信筆」

印章 各「春信」朱文方印

清原春信は、清原雪信（1643-82）の娘で17世紀の第4四半期から18世紀初頭あたりが活躍期と推定されています。母・雪信は江戸初期の狩野派の雄・狩野探幽（1602-74）の姪孫で、探幽門下の四天王のひとり久隅守景（生没年不詳）を父に、同じく四天王の神足常庵（生没年不詳）を祖父に持ち、狩野探幽風の画技を本格的に身につけた専門絵師でした。春信はそうした母から狩野派の画法を学んだに違いありません。描写にはやや拙さも見られますが、その初々しさが魅力ともなっています。雪信・春信は、江戸時代前期という早い時期に、しかも母娘で活躍した点でも希有な存在として注目されます。なお今まで江戸時代後期の文献のみによってしか知られていなかった母娘の関係が、本作の落款「清原氏女雪信娘春信筆」によって明確になったのも貴重です。（N）



昭和十三年試筆書画卷

東伏見宮周子（1876-1955）

昭和13年（1938）

1巻

色紙

紙本墨書

21.0×18.0cm

歌「周子 遠方に不二のね みえて神

そのの しつけき森に あさひ

か、やく」

海老図

統本着色

31.8×106.3cm

印章「親王妃周子印」白文方印、「號小

筠」朱文方印

書

統本墨書

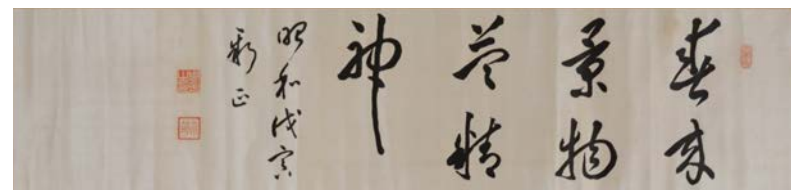
31.9×135.3cm

書「春來景物益精神 昭和戊寅 新正」

印章「天簾閣」朱文橢圓印・関防印、「周

子之印」白文方印、「小筠」朱文

方印



東伏見宮周子は、公爵・岩倉具定（1852-1910）の長女として生まれました。明治31年（1898）、東伏見宮依仁親王（1867-1922）と結婚します。周子は社会活動に積極的に関わり、本学の学祖・下田歌子が発起人に名をつらねる愛国婦人会の第二代総裁や大日本婦人衛生会の初代総裁を務めました。書画や和歌をよくし、明治32年（1899）から女性南画家・野口小蘋（1847-1917）に絵を学び、画号「小筠」を与えられます。小蘋との深い交流は長く続き、小蘋の十三回忌の年に開催された遺墨展の図録『小蘋遺墨集』の題も周子が書しています。

本作は周子の和歌、画、書を合装した一巻です。画は、統本地に熊笹と車海老が描かれています。箱書に書かれた「試筆」は新年のかきぞめを意味します。海老は腰の曲がった姿から不老長寿を象徴するため、新年のかきぞめにふさわしい画題です。墨のほかかで車海老の縞模様をあらわし、尻尾の先に青色を賦するなど、対象をよく観察して写實的に描いています。周子が画を学んだ女性南画家・野口小蘋は写生をよくしました。師から学んだ写生を実践したことが読み取れます。（Y）

紅梅図色紙

白菊図（色紙箱蓋表絵）

東伏見宮周子（1876-1955）

20世紀か

色紙

絹本着色

1枚

21.0×18.1cm

印章「小筠」朱文方印

原俊夫氏寄贈

箱

板地着色

1個

23.7×20.7cm

印章「小筠」朱文方印



水墨で描かれた梅の枝や幹、竹に対して、梅の淡い紅色や点苔の淡い緑色が画面に華やかさを与えています。竹、梅の枝と幹の重なりや、梅の花や蕾と、枝の接触部分が上手く描けていないこと、梅の幹をあらわす墨線が弱々しいことなどから若描きの作品と思われます。一方、箱蓋表に描かれた白菊は、筆線に勢いがあり、白菊の花弁と葉の質感の違いが描き分けられ、画技が上達しています。後に、このような洒落た箱を作ったとすれば、この「紅梅図」に、何か特別な思いがあった可能性が考えられます。（Y）

たんざく きそ
短冊「木曾にあそひて」
ぼくちくず
墨竹図（短冊箱蓋表絵）

ひがしふしみのみやかねこ
東伏見宮周子（1876-1955）

20世紀か	箱
短冊	板地墨画
紙本彩箋墨書	1個
1枚	39.1 × 8.6cm
36.4 × 6.1cm	印章「小筠」朱文方印
歌「木曾にあそひて ほのくら き 杉の木の間に うつくし き つゝし花さく 木曾の山 中 周子」	
原俊夫氏寄贈	

金泥と金砂子で雲霞があらわされた色紙に、流麗な文字で和歌が書されています。木曾に遊んだ際に見た杉木立の間に咲く躑躅の花の美しさが詠まれています。箱蓋表には、力強い伸びやかな筆致で墨竹が描かれています。手前の竹を濃墨で、奥の竹を淡墨で描くことによって、竹の位置関係を的確にあらわし、画面に奥行きを与えています。絵の師・女性南画家の野口小蘋に与えられた画号「小筠」の「筠」は竹を意味します。(Y)

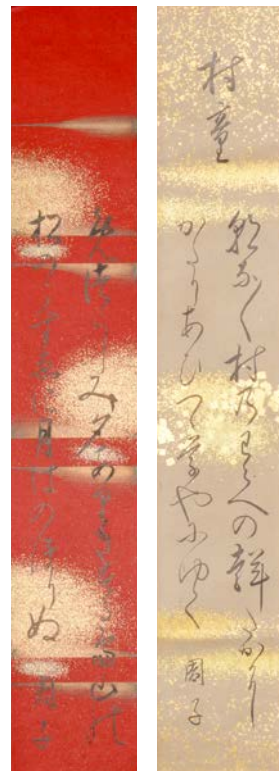


たんざく
短冊「めつらしみ」
たんざく そんどう
短冊「村童」

ひがしふしみのみやかねこ
東伏見宮周子（1876-1955）

20世紀か	「めつらしみ」	「村童」
紙本彩箋墨書	紙本彩箋墨書	
1枚	1幅	
36.5 × 6.0cm	36.0 × 5.8cm（本紙全体：58.4 × 23.4cm）	
歌「めつらしみ 夕ありきする 島山 の 松のこすゑに 月のはほりぬ 周子」	歌「村童 朝な朝な 村のわらへの 聲 たかに かたりあひつゝ 学やにゆく 周子」	
原俊夫氏寄贈		

周子が和歌を墨書した短冊一葉と、和歌を書いた短冊を掛軸に仕立てた一軸が、一つの箱に収められています。外箱蓋表にかけられた紙には「東伏見宮大妃殿下御筆 昭和十三年拝領」と書され、箱蓋表には「御殿山原氏藏」という朱文長方印が捺された紙片が貼付されていることから、昭和13年（1938）に、実業家として知られ、御殿山（現在の品川区北品川）に広大な邸宅と庭園を構えた原家が拝領したものと推察されます。朱地に金泥と金砂子で雲霞があらわされた華やかな短冊「めつらしみ」には、「めつらしみ 夕ありきする島山の 松のこすゑに 月のはほりぬ（現代語訳：夕景がすばらしいと思って散策する庭の池の島山に生える松の梢に月が登りました）」という和歌が書かれています。掛軸に仕立てられた短冊「村童」に書かれた和歌には、村の子供たちの朝のにぎやかな通学の様子が詠まれています。金泥、金砂子、金箔で装飾された短冊は、和歌と呼応して朝日に輝く朝の空を思わせます。(Y)



短冊「めつらしみ」 短冊「村童」

れんべきじょう
連壁帖

はしもとせいこう
橋本青江（1828- ?）

明治6年（1873）跋
紙本墨画淡彩
1冊
17.5 × 12.5cm
題箋「連壁帖」／印章「南岳」白文方印、「九々山人」朱文方印
題「連城壁」／落款「壬子孟春 南岳」／印章「藤恆」白文方印、「南岳」朱文方印、「天香」朱文長方印・関防印
跋「明治癸酉一月望日 写山水及花卉十二頁 供梅屋先生清鑑 即正」／落款「青江橋瑩」／印章「喬瑩之印」白文方印
跋「吾師青江先生 画筆致快暢 墨氣清浄 無一毫□□埃之氣 平素好作山水 此帖佳絶 能被珍藏耶 歎賞之 余儀婁言」／落款「庚申春青蘭河氏」／印章「河邊元印」白文方印、「青蘭」朱文方印、「清遠」白文橢圓印・関防印
藪本俊一氏寄贈



橋本青江は大坂^{せんぱ}船場の資産家の娘として生まれ、名を瑩、字を紫玉といます。画を岡田半江（1782-1846）に、また書を篠崎小竹（1781-1851）に学び、夫の橋本芳谷（生没年不詳）も画家でした。

本作は水墨を基調とした全12図から成る画帖で、漢詩を添えた山水図と花卉図が6点ずつ収められています。青江による跋文には、本作が明治6年（1873）1月15日に描かれたこと、青江と同時期に大阪で活躍した南画家・水原梅屋（1835-93）の清鑑に供したことが記されています。その後、本作は大阪の漢学者・藤澤南岳（1842-1920）の手に渡ったと見え、明治45年（1912）に南岳による題字「連城壁」が加えられました。「連壁帖」という本作の名称も、南岳によって付けられたものです。南岳没後の大正9年（1920）3月には、弟子の河辺青蘭（1868-1931）が本作を目にし、日頃から山水を好んで描いた青江の作品として素晴らしいもので、よくぞ大切に伝えられてきたと、その感動を巻末に書き記しています。(T)

さんすいず
山水図

たにしゅんえい
谷舜英(1772-1832)

寛政期（1789-1801）頃
紙本墨画淡彩
1幅
26.8 × 20.7cm（本紙全体：26.8 × 41.9cm）
落款「舜英」
印章「舜」「英」朱文方印



前景の高い木々と背後の遠山によって、景色の奥行きが作り出されています。水面に映る山影や岩影が、清澄な雰囲気醸し出します。画面中程で小舟に乗って釣り竿を垂れているひとりの漁父こそ、この絵の主役であり、水辺における理想的な隠逸の生活を語るモチーフです。谷舜英は谷文晁（1763-1840）の妹で、儒者であった父・谷麓谷（1729-1809）の薫陶のもとに育ち、10代半ばより文晁とともに知人の接待に臨席し、男性並みの琴や詩を披露して、早熟の才媛ぶりを発揮していました。描く山水画は本図のように、文晁が若い頃に描いた、いわゆる寛政文晁風のものが多いようです。合装されているのは麓谷の門人でかつ夫の中田榮堂（1771-1831）の七言律詩です。夫妻ともに大坂で活躍した画家・松本奉時（1800年没）の書箋を用いて、江戸時代後期に流行する文人趣味を垣間見せています。(N)

こせつくのうち さつき 五節句之内 皁月

かわなべきょうすい
河鍋暁翠 (1868-1935)

明治 25 年 (1892)

木版多色摺

3 枚続

右：35.6 × 23.5cm、中：35.6 × 23.6cm、左 35.7 × 23.6cm

題「五節句之内 皁月」

落款「暁翠」

印章「河鍋氏」白文方印



河鍋暁翠は本名を「とよ」といい、河鍋暁斎 (1831-89) の娘として生まれました。5歳のころから父・暁斎に画技の手ほどきを受け、19歳の折には皇太后と皇后の前で揮毫を披露するほどの腕前でした。また、山名貫義 (1836-1902) に師事してやまと絵も学んでいます。

父・暁斎とおなじく狩野派の系譜に連なる暁翠ですが、浮世絵版画も数多く手がけています。本作もそのひとつで、人日 (1月7日)、上巳 (3月3日)、端午 (5月5日)、七夕 (7月7日)、重陽 (9月9日) の五節句を題材としたシリーズのうち、端午の節句を取り上げたものです。鯉のぼりや戦ごっこをする男の子たちといった、端午の節句におなじみのモチーフに加え、ここでは幼子を抱いた若い女性や、その妹と思しき娘たち、でんでん太鼓を手にした婦人など、女性像が大きく表されています。

本作の印刷年はもとの版木が削り取られたように空白となっていますが、「明治廿五年」と記載された摺りも確認されています。(T)

おどりがた え さかや ごよう 踊姿絵 酒屋の御用

たいこうらん
田井耕耘 (1865-1936)

明治 32 年 (1899)

木版多色摺

1 枚

33.0 × 21.2cm

題「踊姿絵 酒屋の御用」

落款「耕耘」

印章「耕耘」朱文方印

田井耕耘は名を喜久といい、浮世絵師、日本画家の尾形月耕 (1859-1920) に師事して画を学びました。のちに月耕と結婚し、月耕が田井家の婿養子となります。耕耘は日本美術協会や日本美術院の展覧会へ出品しており、ふたりの子どもたち (月山と玉耕) もまた、画家であったといえます。

耕耘の「踊姿絵」シリーズは、歌舞伎や浄瑠璃などの一場面を描いた作品で、現在までに14種が確認されています。本作もそのうちのひとつで、大人しく座る犬を傍らに、羽根飾りをつけた笠をかぶり、チャッパと呼ばれる楽器を手にした踊る人物の姿が描かれています。衣文線はとところどころで擦れた筆の表現が再現され、また背景の家屋や人物の着ている衣には、濃淡や色調の変化によるグラデーションがつけられています。題枠には空摺りで波に松模様を表され、人物がかぶる笠の裏には雲母が施されるなど、細部にまでこだわりの見られる作品です。(T)



【凡例】

・本パンフレットは「第5回 新収蔵品展」(2021年6月7日～7月9日)に際し、発行したものです。

・作品解説の執筆者は以下のとおりです。なお、編集は田所泰が担当しました。

(N)：仲町啓子〔実践女子大学香雪記念資料館 館長〕

(Y)：山盛弥生〔実践女子大学 非常勤講師〕

(T)：田所泰〔実践女子大学香雪記念資料館 学芸員〕

「第5回 新収蔵品展」解説パンフレット

発行日：令和3年(2021)6月7日

令和3年(2021)6月30日 第2版

編集・印刷・発行：実践女子大学香雪記念資料館

〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49

TEL 03-6450-6805

H P <https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/>